

清水 第二二三号 目次



阿弥陀堂で営まれた秋の彼岸入り法要

表紙題字・良慶和上筆 表紙写真・「平成大修理」落慶法要を終えた本堂

「平成大修理」落慶の法樂を厳修 2

落慶記念に森貴主法話集と仏さまガイドブック刊行 6

大修理落慶の佳節に奉納芸能の華々 8

五明洞淨墨 原来平書簡 13

特集 清水寺第105回うらばん法話 14

「平成大修理 落慶を寿ぐ」 15

「北法相宗管長 清水寺貴主 森 清範」 32

「『象徵の歌』から見える平成という時代」 37

〔歌人 J.T.生命誌研究館館長 京都大学名誉教授〕 42

「慈悲の実践」老人福祉の先駆者大西良慶和上の志業」 47

〔社会福祉法人同和園前常務理事園長 橋本武也〕 58

「もったいない!罰がある」 貴船神社宮司 高井和大」 69

「日々初心を味わう」 円福寺専門道場師家 政道德門」 70

「清水寺・古写真館」 孟蘭盆法話の絵葉書」 75

「大西良慶和上法話「中宗の意味」」 82

日日積み重ね七十年余 清水寺警備団(下) 88

〔話し手・法務庶務部長 森孝忍〕 92

「聞き手・高橋義和」 95

「秋の青龍会、行道中止し参拝法要當む」 98

〔吉住恭子〕 102

「四十手深要決義」を読む 第20回 清水寺執事補 森 清顕」 104

〔中井慈眼居士が発願の厨子、地蔵院に戻る〕 106

〔秋の青龍会、行道中止し参拝法要當む〕 108

〔成就院日記〕翻刻・刊行にあたって(26) 清水寺史編纂委員 森 清顕」 112

〔平和とコロナ禍収束祈り MIYAVI氏奉納ライブ〕 116

〔南部風鈴にコロナ禍収束の願い込め飾り付け〕 118

〔名古屋音羽の会が今年も恒例の参拝、供養〕 122

〔京都伝統工芸大学校が学生たちの優秀作品展〕 126

内 外 往 来

編集後記

「平成大修理」落慶の法楽を厳修

154箇月の大事業成就、有縁者集い祝う

平成二十年六月に着手しました清水寺「平成大修理」が今年三月で無魔成就し、落慶法要が九月一日に清水寺本堂で厳修されました。大事業に尽力してきました十方有縁の来賓が内陣に参列するなか、内々陣の御宝前において森清範貫主を導師に一山僧職と中川勇地主神社権宮司、門前の榎原慶治宝徳寺副住職が出仕して法樂を営み、世紀の大修復竣工を御本尊千手千眼觀世音菩薩と諸天諸尊に奉告し喜びをともにし祝いました。

屋根檜皮葺き替えと部分修理などを順次進め、本堂は屋根檜皮葺き替えや舞台板張り替え、高欄新調、漆喰壁塗り替えなど十一年五箇月を掛け修復し、全事業が今年三月に完了しました。これだけの大事業は明治期の修理に匹敵、あるいは上回る規模となりました。落慶法要はコロナ禍に伴う緊急事態宣言下に執行することになり、来賓の出席者を限定し嘗まれました。

京都府教育庁文化財保護課の森正課長、同保存修理事業修理専門委員会委員長の高橋康夫京都大学名誉教授、信徒総代の勘立明弁護士、用達会会長の竹村優夫竹村瓦商会代表取締役ら十名が内陣に参列する中、大講堂を出立し行道してきた森貫主らの会衆が内々陣に入り着座しました。散華したあと、森貫主が表白を嚴かに奉読し一同誦経して落慶を喜びました。最後は全員が舞台に並び記念撮影に臨みました。



「平成大修理」落慶法要で表白を奉読する森清範貫主



内陣に参列し焼香する「平成大修理」有縁の来賓

平成大修理 落慶の9棟



本堂



奥の院



子安塔



南大門



阿弥陀堂



光明院



朝倉堂



光明院



本坊北総門

森清範法話集
こころの姿

落慶記念に出版

清水寺のみほとけ
参拝ガイド

清水寺「平成大修理」落慶を記念して二冊の本が出版されました。森清範貫主が近年、折に触れ説いた法話をまとめた『森清範法話集 こころの姿』と修復を終えた堂塔などに安置されている仏さまを根

立研介京都大学教授が中心になって解説案内する『清水寺のみほとけ 参拝ガイド』です。いずれも全国の書店で販売とともに、落慶のお祝いに特別の箱ケース入りの本を作り有縁の社寺や関係者に

配り、落慶のお披露目としました。

『こころの姿』は森貫主の法話十五話を集め、心の持ち方、有り様を説いています。巻頭の一話は大修理落慶を迎えて特別に書き下ろしました。ほかはコロナ禍の世情に直面して話したものや令和の時代



『森清範法話集 こころの姿』 右は特装の箱入り



『清水寺のみほとけ 参拝ガイド』 右は記念のケース入り

税です。

になって元号の由来となつた梅から説き起こした話、平成三十年の北陸大雪に触れて話したものなど、時の話題を取り入れ仏法をやさしく説き明かす法話スタイルそのままに文章化しています。京都の淡交社からの刊行で定価本体二千円+税です。

一方、『清水寺のみほとけ』

は仏像に焦点を当てた画期的な参拝ガイドブックです。これまで清水寺は建築物や境内の風光に目が行きがちでしたが、堂塔や諸門に祀られている仏さまをほぼすべてカラー写真で紹介しています。こんなに豊富な仏像群が安置されているのかと目を見張らされる内容になっています。説明は簡潔で英訳が付き、絵図・図解も多彩です。東京美術からの刊行で定価本体二千円+

◆特集◆清水寺第105回うらぼん法話

中興開山大西良慶和上が大正四年（一九一五）に始め、京都の夏の風物詩になっています清水寺の「うらぼん法話」が、新型コロナウイルス感染対策を取つて二年ぶりに開講しました。迎えて第百五回となり、例年のように八月一日の開白から五日の結願まで五日間、五名の講師が円通殿で話しました。

会場の円通殿は通常畳と赤い毛氈もうせんが敷かれ、周辺のみ椅子席ですが、養生してすべて椅子席に改め聞法の人気が間隔を空けて座るようにし、入り口には検温器と消毒液を置き感染対策を徹底しました。多くの来場者に備えて例年の洗心洞のほかに、円通殿の戸の外側にテントを立て椅子席を置きモニターから聞法できるように万全の会場準備を整えました。

感染症が衰えないまま七月三十日には京都府にもまん延防止等重点措置が八月一日から発令されるこ

とが決定しました。こうした厳しい状況にもかかわらず、「うらぼん法話」を待ちかねた聞法の人たちが早朝六時の開講前から次々と訪れ、結願の五日は円通殿内がほぼ満席となりました。

開白の初日は歌人でJ.T.生命誌研究館館長・京都大学名誉教授の永田和宏氏が『象徴の歌』から見える平成という時代」と、二日は社会福祉法人同和園前常務理事園長の橋本武也氏が『慈悲の実践』老人福祉の先駆者大西良慶和上の志業」と、三日は貴船神社宮司の高井和大師が「もったいない！罰があたる」と、四日は円福寺専門道場師家の政道德門師が「日々初心を味わう」と、結願の最終日は北法相宗管長の森清範清水寺貫主が「平成大修理落慶を寿ぐ」とそれぞれ題し話しました。森貫主の法話は全文を採録し、ほかの四氏は要旨を掲載します。

平成大修理 落慶を寿ぐ

清水寺貫主 森 清範

朝早くからお参りいただき、ありがとうございます。五日間、勤めてまいりました。「第百五回うらぼん法話」であります。百五回という回数ですから、大正時代に先師大西良慶和上が始められて、脈々と伝えて参りまして、今日に至るのであります。

今年は御覧のようにコロナ禍の中で椅子席にしました。人と人とがあまり接触していけないということであります。三密とよく言われて、その一つに密集があり、寄り合つたら菌が飛んで移るというのです。朝日新聞に出ていた歌がありました。

しばらくは離れて暮らすコと口とナ
つぎ逢ふ時は君といふ字に

うまいこと考えました。君という字は分解しますとコ・ロ・ナになります。しばらくは離れていますが、次に寄り集まつた時には君に逢いたいというの



うらぼん法話結願法要。今年は感染症対策をとって行われた

であります。いざれはコロナ禍もおさまって、また元に戻ることと思ひますが、しばらくの我慢であります。われわれ人間は社会的な存在ですから、人と人が寄り合い楽しく深く付き合うことによつて相互理解し人間関係を築き、そこに文化や学問や宗教が生まれ発展して行くものだと思ひます。

今日は「平成大修理 落慶を寿ぐ」という演題を出させていただきました。ご承知のように当山は平成二十年から重要文化財の建物八棟と国宝の本堂一棟合わせて九棟を解体あるいは半解体の修理をして参りました。十年余をかけて、昨年十二月三日に本堂完工法要をいたしました。

お籠りをした清少納言と紫式部

清水寺は宝亀九年（七七八）に創建をされておりますので、千二百年余の歴史があります。この間、観音さまの靈験あらたかな道場として、殊に平安時代から今日まで本当にいろいろな方々、それこそ老若男女、職業もさまざまな人たちがお参りしております。平安時代ですと、よく知られているところでは



森清範貫主

清少納言や紫式部もよくおいでになり、お籠りをして随筆や和歌にあらわしております。後白河法皇の『梁塵秘抄』には「観音験を見する寺 清水石山長谷の御山」と歌つていて、清水寺に参る道行も詠んでいる今様歌を載せています。室町時代には能の謡曲、江戸時代では淨瑠璃や歌舞伎にも清水寺が登場して、歌われて描かれて、伝承してきているのが二百年の歴史であります。

いま申し上げました清少納言と紫式部は同時代の人

物です。当時の天皇は六十六代一条天皇であります。その天皇に二人の中宮が立ちました。定子中宮と彰子中宮です。それぞれに女房として清少納言と紫式部が仕えたのですからライバル関係にあつたわけです。それで紫式部は日記にこんなことを書いています。

「清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、まな書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬことおばかり」清少納言は得意顔で、チャラチャラしている人だというのです。賢がつて漢字なんか書き散らしているけど、よく見ると、まだ足らんところがたくさんあると言っています。きつい言葉です。

そのような清少納言ですが、ご存じのように有名な

『枕草子』を書いております。そこに皆さんと同じように朝早く説教を聞きに行つた話をつづっています。説教するのは講師といふ人ですが、ちょうど私たちのよくな人であります。どんな人がいいか書いています。

「説教の講師は顔よき」。男前がよいというのです。女性ですね。今の言葉で言いましたら、イケメンがよいというのです。「講師の顔をつとまもらへ

たること、その説くことのたぶとさも覚ゆれ」。男前の講師はジッと見とれて聞いていますから、説いているところも尊く思われます。ところが、男前でない講師は「ひが目しつれば、ふと忘るるに、にくげなるは罪や得らんと覚ゆ」とあります。つまり、よそ見をしてしまいますので、説教の内容も忘れてしまつて罰が当たる気がすると言います。そして、「このことはとどむべし。すこし年などのよろしきほどは、かやうの罪得がたのことは書き出でけめ、今は罪いとおそろし」とありますて、男前がよいとかこれ以上書かないでおこう、若い時なら書いたらうけれど、年取つてあの世も近いので罪が恐ろしい、と言いながら、このように書いているのです。

清少納言が結縁の法華八講に行きました時には、朝座の講師にこういう人が登場してきました。清範。どこかで見たような名前です。説教の名人と評判の僧侶であります。この人が登場しますと高座の上も光満ちたる心地して、いみじうぞあるや」という様子だったそうです。それで「暑さのわびしきに添へて、しさしたることの今日過ぐすまじ